

結 髪 形 土 偶

—男鹿市上鮎川Ⅰ遺跡で発見された遺物から—

磯 村 亨

1 はじめに

ここに紹介する結髪形土偶は昭和26年当時、南秋田郡五里合村立五里合中学校（現男鹿市立五里合中学校）の生徒が採集したものである。発見場所は、『秋田県遺跡地図・中央版』^{（註1）}によると、男鹿市五里合字上鮎川地内に所在する上鮎川Ⅰ遺跡である。この遺跡からはもう一つの土偶が出土しており、これについては、奈良修介が昭和29年『叢』誌上に「遺物より見た男鹿半島の古文化」と題する論考のなかで紹介している。

上鮎川Ⅰ遺跡の北方には五里合盆地が開けており、その周辺の台地には縄文時代の遺跡が多数存在している。第1図は、これらのうち代表的な遺跡の位置を示したものである。なお、金沢大学の藤則雄らは、五里合盆地の花粉分析を行ない、縄文時代中期から現代までの自然環境を復元している。^{（註2）}

2 紹介資料

頭髪部の一部、頭部左側、左腕、下半身を欠いた土偶である。残存する頭部から胴部までは17.9cm、胴回りは13.2cm、重さは110.0gを測る。表面は、全体に丁寧な磨きを施し、顔・胸・背の一部には赤色顔料が残っている。左腕と胴部の欠損部にはアスファルトが付着している。頭頂部には結髪を表現するため粘土を貼り付けている。首の上には斜め上方を向いた逆三角形を呈する板状の顔を取りつけている。顔は、額に粘土紐を貼り付けて刻みを施すことにより眉を表現している。鼻は山形の突起で眉と連続しており、鼻孔は断面が半円形の施文具による2個の刺突で表している。目は楕円形の凹みで表している。口は粘土瘤を貼り付けて中央部を楕円形に凹めて表現している。肩部は幅広く横に張り出している。手は肩部の先端部に垂れ下がっている。胴部文様は、両腕の付け根から喉元まで平行沈線を施し、沈線間には刻みを充填している。喉元から臍までは2本の沈線が垂れ下がる。臍は沈線を環状に巡らすことにより表現している。背には両腕の付け根から工字文が施される。工字文の下には6字状の沈線が垂下している。

結髪形土偶について佐藤嘉広は、頭部が結髪状の表現をなす、顔面が斜め上方を向くことが多い、肩部には特に装飾をもたない、胸部には肩から延びる隆帯により乳房としている、胴部には丁寧な磨きが施され、^{（註3）}地文等を持たない沈線による文様が描かれる等をその認定要件としてあげている。本土偶は、この認定要件をほぼ満たすものであり、結髪形土偶の範疇に含まれるものと考えられる。

3 おわりに

本土偶の用途・機能についての詳細は知る由もないが、器面に赤色顔料が塗られ、破損部をアスファルトで接着していることから、ある一定の期間何らかの用を果たしていたことが予想される。

秋田県内において縄文時代晩期後葉の土偶が出土した遺跡として、秋田市上新城中学校遺跡、地蔵田B遺跡、増田町平鹿遺跡、湯沢市鐙田遺跡等があげられる。同じ時期の土偶であるにもかかわらず、髪の実現等細部に違いが認められる。これらが地域差から来るものなのかあるいは微妙な時期差を意味するものなのかどうかについては、同一地域からの類例の増加を待ちたい。

本稿を成すにあたり以下の方々からご教示、ご助言いただいた。記して謝意を表したい。

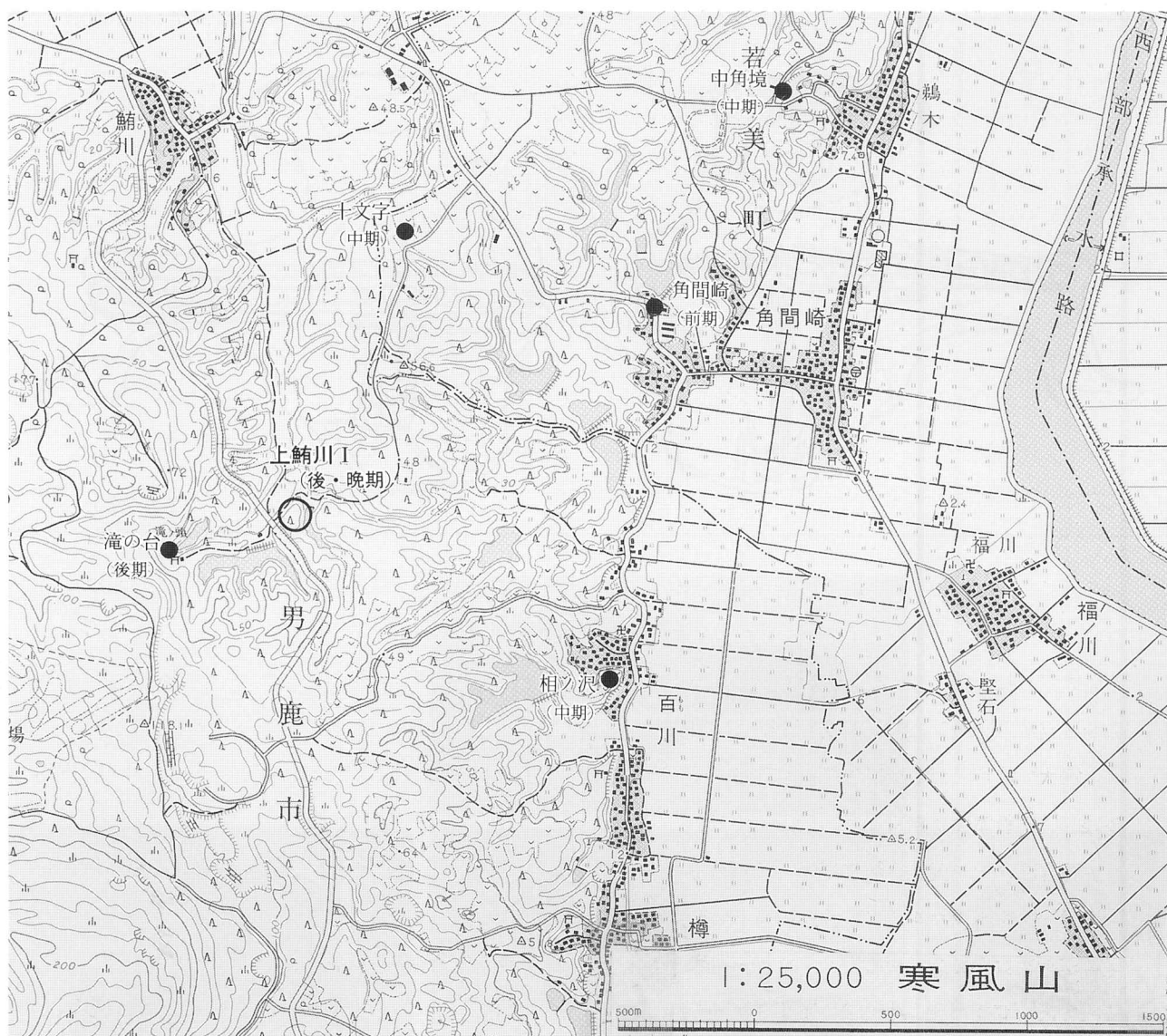
五十嵐一治、栗澤光男、高橋忠彦（五十音順、敬称略）

註

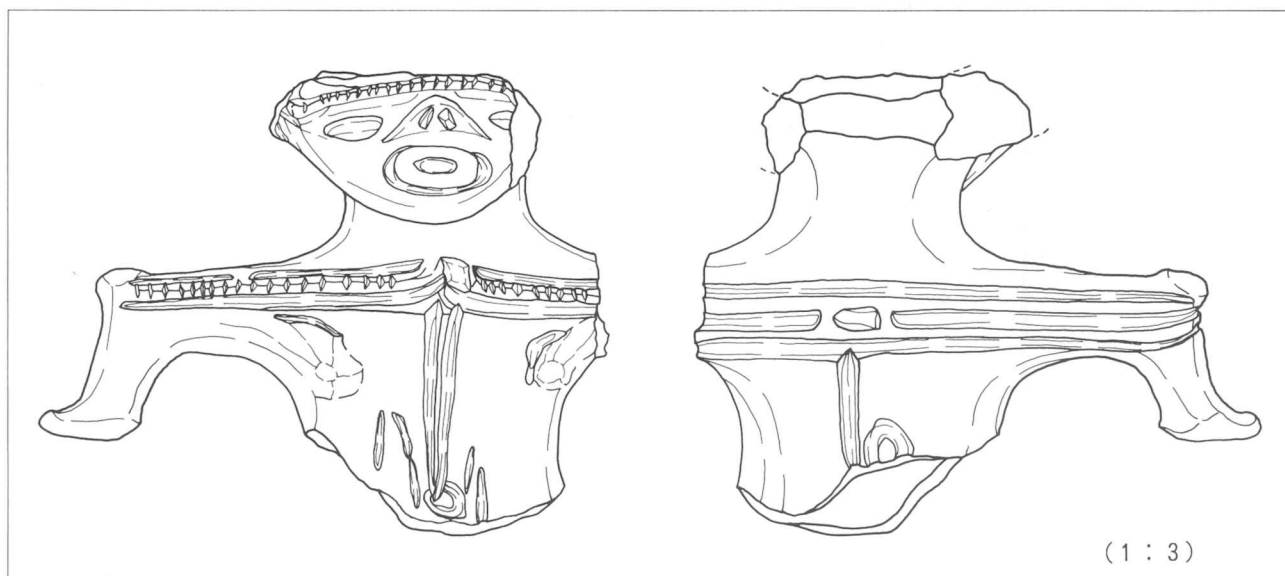
- 1 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（中央版）』1990（平成2）年
- 2 平成4年五里合盆地において藤則雄らが行った花粉分析により、遺跡の立地する丘陵地にクロマツ・アカマツ・コナラ等の二次林が縄文時代晩期頃に成立していたことが明らかになっている。二次林の成立がすなわち人間活動に起因するものであるとは断定できないが、少なくとも当時の丘陵に原植生を改変する外的要因が存在し、その結果二次林が成立していたのであるから、その外的要因は二次林がある程度の期間存在しうるほどに継続的なものであったと考えられる。このことから二次林成立が人間活動に起因すると考えることが適当であろう。
藤則雄・磯村朝次郎・高島麻衣子・邑本順亮「男鹿半島五里合における完新世の古環境解析」『金沢大学日本海域研究所第26号』1995（平成7）年
金沢大学教育学部地球科学教室藤研究室「秋田県八郎潟堆積物に基づく後氷期の環境解析」『金沢大学教育学部地球科学教室藤研究室専報Ⅱ』1997（平成9）年
- 3 佐藤嘉広「亀ヶ岡文化終末期の土偶」『土偶シンポジウム5 宮城大会 東北・北海道の土偶Ⅱ—亀ヶ岡文化の土偶—シンポジウム発表要旨』1996（平成8）年
- 4 秋田市教育委員会『秋田市上新城中学校遺跡—学校改築に伴う緊急発掘調査概報—』1992（平成4）年
- 5 秋田市教育委員会『地蔵田B遺跡—秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書—』1986（昭和61）年
- 6 秋田県教育委員会『平鹿遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第101集 1983（昭和58）年
- 7 秋田県教育委員会・湯沢市教育委員会『鐙田遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第28集 1974（昭和49）年

参考文献

- 江坂輝弥校訂・小野美代子著『土偶の知識』東京美術 1984（昭和59）年
奈良修介「遺物から見た男鹿半島の古文化」『叢』vol.19 No.40叢社 1954（昭和29）年
秋田県教育委員会『石名館遺跡第2次発掘調査報告書—仙北平野農業水利事業上総川排水路工事に係る埋蔵文化財発掘調査—』秋田県文化財調査報告書第138集 1986（昭和61）年



第1図 上鮎川 I 遺跡とその周辺の主要縄文時代遺跡位置図



第2図 結髪形土偶